

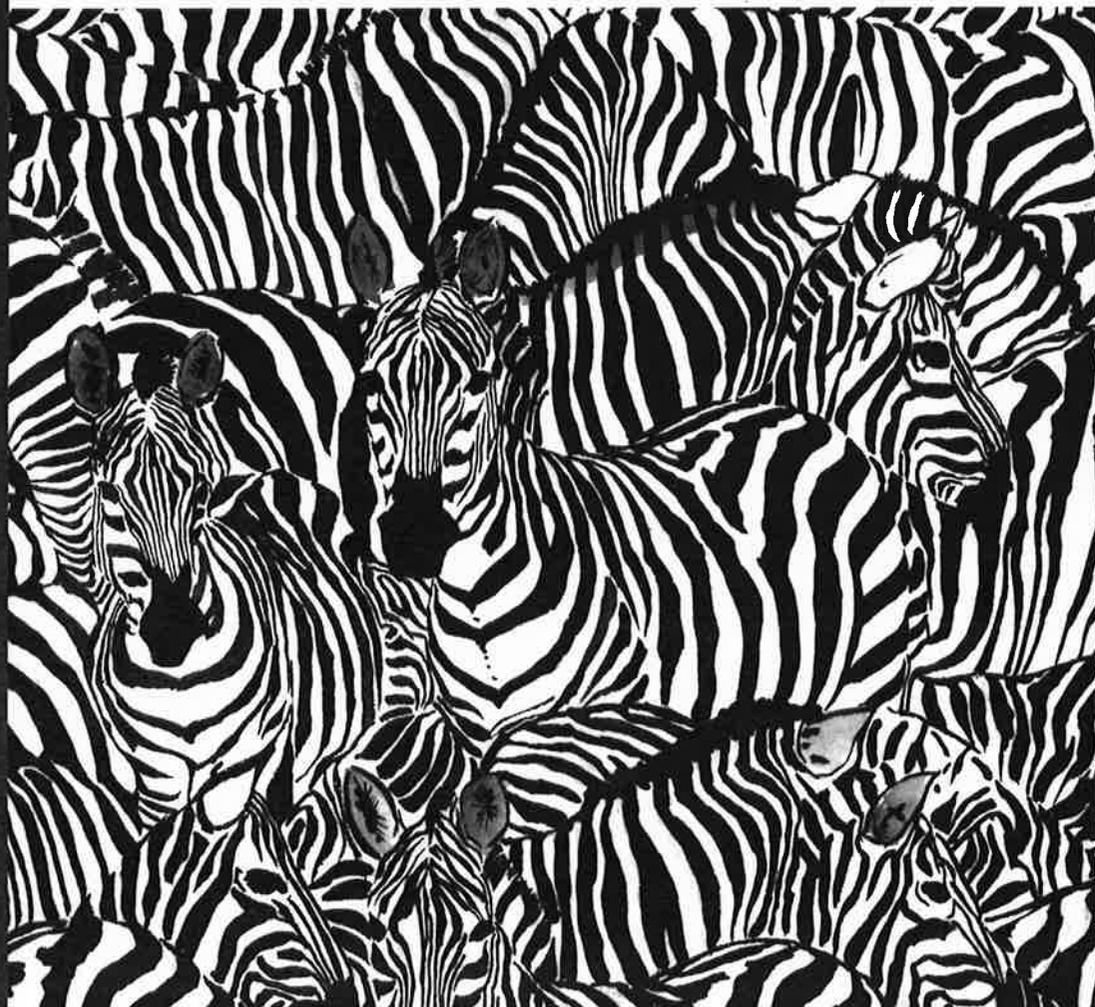
文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
平成三年八月一日発行(毎月一回)日発行
第九十六卷第八号(七月十日発売)

小泉進次郎「国会改革宣言」95th

文藝春秋

大特集「定年後」最強のマネー術 / 特別授業 半藤一利×池上彰 八月号



將軍の世紀

やまうちまさゆき
山内昌之
武蔵野大学特任教授・
東京大学名誉教授

「第八回」官女密通一件

朝廷内で公家と官女による乱倫が発覚し、後陽成帝は激怒。だが、これを機と見た家康は智略をめぐらせる――



の密通事件が後陽成天皇の御膝元で起きた。慶長十二年（二六〇七）から慶長十四年にかけて摘発された官女密通一件である。時に猪熊事件とも呼ばれた。徳川家康に近い『当代記』は、事件を慶長十四年七月十四日に駿府から京都へ使者派遣、という記述から始める。

公家衆が禁中で、「主上に近習する女房と猥りに参会」し、「形儀無き故也」。家康の使者は、朝廷ではモラルも崩れたので調査に出かけるというのだろう。「主上甚逆鱗」とは、後陽成天皇が、公家九人と女房衆五人にいずれも死罪を申付けよ、と激怒したことを指す。龍は顎の下にある逆鱗に生えた鱗に人が触れると怒ってその人を殺すという（『韓非子』「説難」）。『台徳院殿御実紀』では、「当今（今上天皇）の御いづくしみを蒙る女房」の広橋局と唐橋局はじめ五人の女房は、公家らに「挑まれてしばしば参会し、酒宴乱行に長じけること露頭し」とある。「挑む」「挑まれ」とはいかにも淫奔な雰囲気醸し出す言葉ではないか（巻十、慶長十四年七月十四日条）。『当代記』は、この男女の実名を明記している。

「去年の比より、内裏稀有なること有、主上近習之女房衆、広橋局、唐橋局、以上五人乱形、中にも此兩人主上寵愛の女性也、広橋は則広橋大納言息女、唐橋は中御門也足、当時の知者、之息女也、縦は傾城かふき女の如

一、光源氏と在原業平の再来か

「むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに來けり」。これは『伊勢物語』第六段（芥川）の出だしである。女性は二条后（清和天皇女御）の藤原高子であり、男性は在原業平とされる。物語では、望んでも手の届かない女を、長い間求めつづけて、やっとの思いで盗み出し、たいそう暗い所を逃げてきたというのだ（鈴木健一『伊勢物語の江戸』）。

男の情熱はひとまず恋といえるのかもしれない。近づくのも困難な相手にあえて立ち向かうのは、恋の本質だとしても、文学の美と歴史の实在性は異なる性格をもつ。女御と密通しながら法や道徳を超越する「美」は、現実の歴史や政治の磁場で認められるとは限らない。

『伊勢物語』は、業平という実在の人物の王朝のみやびと耽美的な世界を、朝廷に関わる青少年公家に自らの恋愛や性への衝動と重ねる読み方を可能にさせる。独特で妖しい魅力を醸し出す世界に耽溺すると、『伊勢』や『源氏』に羨望しながら虚構の世界を現実と錯覚する公家が現れるのは否めない。果たして未熟な公家と官女と

く、洛中を出行、専公家九人是对面、酒盛最愛し、膺次乱るる」（慶長十四年八月十六日条）

去年の頃から朝廷では稀有な事件が起きている。天皇に近侍する女官たちは、勝手気ままに遊女や奇抜な踊り女のように、京都市中を徘徊し、公家九人ともつばら出会い、酒盛りに感溺して膺次つまり秩序を紊乱した、というのだ。広橋局は兼勝大納言の息女で新大典侍という女官を束ねる立場の女房であり、「天下の美女」と謳われた。唐橋局は掌侍の職にあり、菅内侍ともいい、唐橋（本姓は菅原）在通の娘である。也足軒とは中院通勝の号なので『当代記』は二人を勘違いしたのでだろう。他の三人は、通勝の娘で権典侍の中院局（仲子）。さらに、中内侍の水無瀬局は水無瀬氏成の娘であった。それに下級女官の命婦讃岐もいた。『お湯殿の上の日記』は、事件をさらにと綴っている。「新大すけ殿、権すけ殿、中の内侍殿、かんないし殿、さぬき、此五人しんたいわろくて、おやおやにあつけをかるる。又おとこしゅうも何かときたあり」（慶長十四年七月四日条）。

「しんたい（進退）わろく」とは「起居振舞がうとましい」くらいの意味だが、親たちに預けられたというのだ。四人の局は帝の寵愛を受けて皇子女を儲けるかもしれなかったが、どの女房にも子どもはまだいない。『当